

「七福神」訳註(6)

―石川鴻斎『夜窓鬼談』(上)より―

6 七福神

牛 尾 弘 孝

(大分大学教育福祉科学部国語科教室)

尾 牛

【要旨】 幕末から明治・大正にかけての漢学者石川鴻斎(一八三三―一九一八)の怪異小説『夜窓鬼談』については、国立国会図書館の上下二巻二冊の活字本で見ることができる。文章は漢文で書かれているが、題材は例外を除いてすべて日本に取られている。その意味では和漢文学の比較研究の対象として取りあげるには恰好の作品だと言ってよい。そこで本稿では全文に訓読・現代語訳・註を施すことにした。前号に続き、今回は第六回目として「七福神」を扱う。底本の紹介および凡例は、第一回目(本誌第一九巻第二号、一九九七年十月)を参照されたい。

【キーワード】 夜窓鬼談 鬼 狐 狸 怪

中古有称七福神者、不知其所由来。然市人以為商賈喜神、歳首及甲子日必祀焉。其烏帽素袍、右手執長竿、左手抱紅鬣魚、飄然坐巖上者、為惠比須三郎。其頭巾胡服、把木槌、脊布囊、嚇然立於米芘上者、為摩迦羅大黑天。其雲鬢華飾、繡衣璀璨、艷姿閑雅、手彈琵琶者、為弁財天女。傍有老僧、滿腹便便、脫袈裟、倚巨囊、怡然聽曲者、散聖布袋和尚也。其長頭短軀、縛黃卷於竹杖、持仙桃一顆、莞爾愛鶴者、為南極寿星。葛巾道服、擁藜杖撫白鹿者、為北極寿星。金鍔鉄甲、右手把長戟、左手捧宝塔、巍然孤立者、為毘沙門天王也。嘗聞、此七神常居七宝之宮殿、住珠玉之樓閣、或閑行市中、遊戲衢術、欲使世之貧者為福者。故世間貪鄙之人、列俎豆設精饌、百拜稽首、以徼幸福。

酒肆某使面工描之、供蘿蔔兩岐与棘鬣三尺(二物祀惠比須神、大黑天供物)、焚香点灯、祈福頻。忽夢福神携槌与囊。告某曰、汝祈神徼財甚切。福神主財、不吝与人、人不能得之也。孔子不言乎、富与貴是人之所欲也、不以其道得之、不处也。所謂其道者、無他術。以仁義忠孝為行、以勉強耐忍為務、以廉直恭謙修之、以質素儉約守之。而敬上恤下、厚親族朋友、憐貧民惇独、薄利欲不為欺、宗正路不行偽、財神常守護、可以与多福矣。世人不知修斯道、奢恣暴行、飽肆貪慾、欲奪羈客之囊橐、拔奔馬之眸子。而自懼其窮困、陰奉財神、欲以獲奇福。吁亦何其愚也。孟軻所謂緣木而求魚者、安有得之之理哉。夫福神者、常貯福不妄与人。故得為福神、若聽所謂、尽授人、福神忽為貧神矣。且天下之人、聞福神授福、則無不請求者。若使庇之充其溪壑、使金銀如土泥不足也。人能以其道求之、雖欲不授不能也。言訖徐徐而去。某夢覺、有恍然而悟。自是奉夢裏示教、大饒其產、為大福長者云。

龍仙子曰、七福者、三国之人、想狡僧所集、使俗人喜已。文本西園雅集、祭祀之法、亦儒者口吻。

中古に七福神と称する者有り、其の由来する所を知らず。然れども市人以て商賈の喜神と為し、歳首及び甲子の日には必ず祀る。其の烏帽素袍^{えぼしすおう}、右手に長竿を執り、左手に紅鬘魚^{べにまげうま}を抱き、飄然^{ひょうぜん}として巖上に坐する者は、恵比須三郎と為す。其の頭巾胡服^{こふく}、木槌^{こづち}を把り、布囊^{ふくろ}を脊^{せお}に懸^かけ、嚇然^{かくぜん}として米芫^{べいけん}上に立つ者は、摩迦羅大黒^{まがらだいこく}と為す。其の雲鬘^{うんま}は華飾^{けがし}、繡衣^{しゅうい}は瓊漿^{じゆうせう}、艶姿^{えんそ}は閑雅にして、手に琵琶を弾ずる者は、弁財天女^{べんさいてんじゆ}と為す。傍に老僧有り、滿腹便便^{まんぷくべんべん}として袈裟^{けささ}を脱ぎ、巨囊^{きよう}に倚^より、怡然^{いぜん}として曲を聴く者は、散聖布袋^{さんせいぶたい}和尚^{おしょう}なり。其の長頭短軀^{ちやうたんたんく}、黄卷^{わうけん}を竹杖^{ちやくしやう}に縛り、仙桃^{せんたう}一顆^{いっかく}を持ち、莞爾^{わんじ}として鶴^{つる}を愛する者は、南極寿星^{なんごくじゆうせいせい}と為す。葛巾^{かきん}道服^{だうふく}、藜杖^{れいしやう}を擁^{もち}ち白鹿^{はくろく}を撫^なずる者は、北極寿星^{ほくごくじゆうせいせい}と為す。金鍔^{きんぶつ}鉄甲^{てつが}、右手に長戟^{ちやうき}を把り、左手に宝塔^{ぼうたう}を捧^たげ、巍然^{ゑいぜん}として孤立する者は、毘沙門天王^{びさもんてんわう}と為す。嘗て聞く、此の七神は、常に七宝^{しちほう}の宮殿^{きゆうてん}に居り、珠玉^{しゆぎよく}の樓閣^{ろうかく}に住み、或いは市中を閑行し、衛術^{ゑじゆつ}に遊戯^{ゆうぎ}し、世の貧者をして福者と為さしめんと欲すと。故に世間の貪鄙^{こんひ}の人、俎豆^{そどう}を列ね精饌^{せいけん}を設け、百拝稽首^{ひやくぱいきしう}し、以て幸福を徼^{もと}む。

酒肆^{しゆせい}の某、画工をして之を描かしめ、蘿富^{らふ}阿岐^{あき}と棘^{きんくろ}鬘^{まげ}三尺^{さんせき}(二物は、恵比須神・大黒天を祀る供え物)とを供え、香を焚^たき灯を点し、福を祈ること頗^{しほ}なり。忽ち福神の、槌^{つち}と囊^{ふくろ}とを携^{もち}うるを夢む。某に告げて曰わく、「汝、神を祈つて財を徼^{もと}むること甚だ切なり。福神、財を主^{つかさど}つて、人に与^{あた}うるを惜^{おし}まざるも、人、之を得ること能わざるなり。孔子言わすや、『富と貴きとは、人の欲する所なり。其の道を以て之を得ざれば、処らざるなり』と。所謂其の道とは、

他術無し。仁義忠孝を以て行いと為し、勉強耐忍を以て務めと為し、廉直恭謙を以て之を修め、質素儉約を以て之を守る。而して上を敬い下を恤^{あわれ}み、親族朋友に厚くし、貧民憐^{あは}れ、利欲を薄くして欺くことを為さず、正路を宗として偽を行わずんば、財神常に守護して、以て多福を与^{あた}ふ可し。世人斯の道を修むるを知らずして、奢恣^{しやし}暴行、飽くまで貪慾を肆^{ほしま}にし、竊客^{せきやく}の囊^{ふくろ}を奪^{うば}ひ、奔馬の眸^{ひとみ}子を抜かんと欲す。而れども自ら其の窮困を懼^{おそ}れ、陰かに財神を奉^たじ、以て奇福を獲んと欲す。吁亦た何ぞ其の愚なるや。孟軻^{もうか}の所謂、『木に縁^よりて魚を求むる』者^{しや}にして、安くんぞ之を得るの理有らんや。夫れ福神は、常に福を貯^{たくわ}えて人に与えず。故に福神為るを得て、若し請^たう所を聴^きき、尽く人に授^{あた}ければ、福神忽ち貧神と為る。且つ天下の人、福神、福を授くと聞けば、則ち請求せざる者無し。若し之に応じて其の溪壑^{たに}を充たしむれば、金銀をして土泥の如くならしむるも、足らざるなり。人、能く其の道を以て之を求むれば、授^{あた}げざらんと欲すと雖も、能わざるなり」と。言い訖りて、徐^{じゆ}より夢裏の示教を奉じて、大いに其の産を饒^{ゆたか}かにし、大福長者と為ると云う。

龍仙子曰く、「七福は、三国の人なり。想うに、狡僧の集むる所にして、俗人をして喜ばしむるのみ。文は西園雅集に本づき、祭祀の法は、亦た儒者の口吻なり」と。

むかし七福神とよばれているものがあり、その由来についてはよくわからない。しかし、商人は商売の福の神として、年のはじめや甲子の日には、必ずお祀りしていた。烏帽子に素襖(の姿で)、右手に長い竿を持ち、左手に鯛を抱き、にこにここと笑って岩の上に座っているのが、恵比須三郎である。頭巾に胡服(の姿で)、木槌を持ち袋を背

負い、からからと笑つて米俵の上に乗っているのが、摩迦羅大黒天である。綺麗な髪飾りにあざやかな刺繍の着物、優雅で艶やかな姿をして、手には琵琶を弾いているのが、弁財天女である。そのかたわらに腹の肥え太った老僧がいて、袈裟を脱ぎ、大きな袋にもたれながら、楽しそうに音曲を聴いているのが、散聖布袋和尚である。長い頭に短い体、巻物を竹の杖に結びつけ、桃をひとつ持ち、にっこり笑つて鶴を愛しているのが、南極寿星である。仙人の装いであかざの杖を持ち、白鹿をなでているのが、北極寿星である。金の兜に鉄の鎧、右手に長い矛を持ち、左手に宝塔を捧げ、超然と独り立っているのが、毘沙門天王である。以前に聞いたことがある、この七福神は、つねに七宝の宮殿に居るものや、珠玉の楼閣に住んだりするものや、一方では街中をそぞろ歩いたりするものや、巷を自在にゆきまわることがいて、世間の貧しいものを幸福にしようとする。だから欲張りな心が卑しいひとは、祭器を並べ、選りぬきの供え物を設けて、うやうやしく頭をたれて、幸福を求めるのである。

ある酒屋が、絵かきに(恵比須神と大黒天を)描かせ、二股大根と三尺の鯛を供え(この二つは、恵比須神と大黒天を祀る供え物)、香をたき灯りをともし、しきりに福德を祈った。たちまち木槌と袋を持つた福の神が夢に現れた。その人に告げて言うには、「お前は神に祈つて、たいそう熱心に財貨を求めている。福の神は財貨を取りあつかつており、人に与えることを惜しまないけれども、人が手に入れることができないのだ。孔子が言っているではないか、『富と貴い身分とは、人がほしがらるものだ。(しかし)正しい方法で手に入れるのであれば、その地位に身を置こうとしない』と。正しい方法とは、次のようなものだ。仁義・忠孝を行いとし、勉強・忍耐を務めとし、廉直・恭謙によつて身を修め、質素・儉約によつて身を保つ。そうして上の人を敬い下の人をいたわり、親族や友人を手厚くもてなして

貧しい人や身寄りのない人を気のどくに思い、利欲にとらわれず欺いたりせず、正しい道を尊んで偽つたりしなれば、福の神がつねに守つてくれ、たくさんの福德を与えることができるのだ。世間の人はこの正しい方法を学ぶことに思い至らず、驕りたかぶつていたい放題、満足するまで欲望をみだし、旅人の財布を奪い、生き馬の目を抜こうとする。しかし自分では貧乏になることを恐れ、ひそかに福の神を奉つて思いがけない福德を手に入れようとする。ああ、なんと愚かなことか。孟子が言っている『木に登つて魚を求めろ』ようなもので、そんなことができる道理があるものか。そもそも福の神はつねに福德を貯えて、むやみに人に与えたりしないものだ。そういうわけで福の神とはいへ、お願いを聞き入れて、すべての人に授けるならば、たちまち貧乏神となつてしまうのだ。そもそも世間の人には、福の神が福德を授けると聞き、お願いしないものはいない。その谷ほど深い欲望に依るならば、泥のように金銀をつぎこんでも、足りるものではない。正しい方法で求めるならば、授けたくなくても、できるものではない」と。言い終わると静かに消えてしまった。酒屋は夢から醒め、恍惚の状態で悟るものがあつた。それ以来、夢のなかの教えを奉つて、おおいに資産を豊かにし、大福長者となつたということだ。

龍仙子が言う、「七福神は、(日本・中国・インドなどの)三国の人である。わがしこい坊主が集めてきて、俗人を喜ばせようとしたのである。本文(の七福神の集まり)は、西園での(蘇東坡や米芾たち文人の)風雅な集まりにもとづいており、福の神を祀る方法は、儒者の言い方(を思わせるもの)である」と。

注

注一 甲子の日—かのえねの日は、年に六回ある。通常、甲子の日に

祀るのは、大黒天である。石川鴻斎が恵比須神を甲子の日に祀るとしたのは、両者がともに台所に祀られることの多いために混同したものとと思われる。

注二 烏帽素袍―烏帽は黒い頭巾、烏帽子のこと。素袍は素襖に同じ。室町時代に始まり、庶民の着ていたものであるが、のちに武士の服装となる。

注三 紅鬣魚―鯛のこと。鬣は魚のひれ。

注四 靦然―にこにここと笑うさま。

注五 恵比須三郎―夷三郎、もしくは蛭子神とも記す。伊弉諾尊・伊弉冉尊の第三子であったというところからの称。『日本書紀』巻一・神代上によれば、第一子は天照大神、第二子は月読尊、第四子は素戔嗚尊。蛭子(ひるこ)神は三歳まで足が立たなかつたため、葦船に乗せて流されたとされているが、その異形のさまを畏怖し、福の神として信仰されるようになった。海上に縁があるため漁業の守護神であるが、商売繁盛の福神として祀られる。恵比須講として知られる。

注六 頭巾胡服―頭巾は大黒頭巾のこと、円形で低く、わきにふくれでた形をしている。くくり頭巾ともいう。大黒天はもともと天竺(インド)の神で、仏教の守護神であることから胡服をまといるとされる。

注七 嚇然―からからと笑うさま。

注八 米芑―米桶。ここでは米俵のこと。

注九 摩迦羅大黒天―正しくは摩訶迦羅で、大黒天のこと。日本神話の大国主命に重ね合わせて信仰され、台所に祀られている。米俵に乗っているのは、大黒天が農業に縁のあることを示しており、西南日本において大黒天は田の神として祀られていることが多い。

注十 雲鬢―婦人の雲のようにふさふさとしたまげ。

注十一 弁財天女―ガンジス河を神格化したもので、知恵・財宝を与える福神として広く信仰されている。衆生に福徳を与える吉祥天と同一視される女神。ともにインドの神のひとつ。

注十二 便便―腹部の肥満しているさま。

注十三 怡然―喜び楽しむさま。

注十四 散聖布袋和尚―散聖は出家した人の尊称。布袋は唐末の禅僧。弥勒菩薩の化身として尊崇される。日本では七福神のひとつで、円満な容貌が好まれた。

注十五 黄卷―書籍。むかしの書籍は虫食いを防ぐため、黄檗(きはだ)で染めた黄色の紙を用いた。ここでは道教の経典のこと。

注十六 仙桃―長寿を願う前漢の武帝が、西王母から仙桃を与えられたという故事から、仙人と縁が深い果物。

注十七 莞爾―にっこりと笑うさま。

注十八 鶴―通常、仙人は黄鶴に乗るとされる。

注十九 南極寿星―福祿寿のこと。南極星の化身で、幸福・俸祿・長寿を授ける。

注二十 葛布道服―葛布はくずぬので作った隠者の頭巾。道服は道士の着る服。

注二十一 藜杖―あかざの茎で作った杖。若葉は食用となり、茎は杖となる。

注二十二 白鹿―清の黄漢の『錦字箋』に、「鹿は千歳にして蒼(あお)お、また五百歳にして白、また五百歳にして玄(くろ)とある。

白鹿は千五百歳を経るとされる。

注二十三 北極寿星―通常、寿老人のことを南極老人(南極寿星)とするが、福祿寿を南極老人にあてることもあり、混同されることが

多い。石川鴻齋は福祿寿を南極寿星にあて、寿老人を北極寿星にあてている。寿星は南極星のことで、中国では南極老人星と称し、これを祀って幸福と長寿を祈る。鴻齋は混同を避けるために、あえて寿老人のことを北極寿星とよんだものであろう。

注二十四 宝塔―仏塔のひとつ。壁は円形で、上に方形の屋根をつけた単層の塔。

注二十五 巍然―山の高いさま。

注二十六 毘沙門天王―四天王のひとつで多聞天ともいう。仏法を守護し福德を授ける。

注二十七 七宝―七種の宝物。たとえば『無量寿経』では、金・銀・瑠璃・玻璃・車渠（しやうき）（おうぎ貝）・瑪瑙・珊瑚など。仏教經典によって違いがある。

注二十八 衢衢―巷（ちまた）。

注二十九 俎豆―俎は魚や肉などを載せるひら台。豆は食物などを盛るたかつき。ともに祭器。

注三十 蘿菈両岐―旧曆十二月に、二股大根を供えて大黒天を祀る風習がある。

注三十一 棘蠶―ここでは鯛のこと。

注三十二 富と貴きとは―『論語』里仁篇にもよひく。

注三十三 惇独―惇は兄弟のないもの。独は老いて子どものないもの。ともに身寄りのないものをいう。

注三十四 羈客―旅人。

注三十五 囊橐―ふくろ。ここでは財布のこと。

注三十六 孟軻―孟子、字は軻。孔子に次いで亜聖といわれる。

注三十七 木に縁りて魚をもよむ―『孟子』梁惠王章句上にもよひく。全く不可能なことをいう。

注三十八 徐徐―ゆるやかなさま。

注三十九 龍仙子曰く―石川鴻齋自身の標語。第一回目（本誌第一九卷第二号、一九九七年十月）の註（54）を参照されたい。

注四十 西園雅集―唐の元祐二年（一〇八七年）、王誥（せん）の邸宅（西園）で催された文人の風雅な集まり。蘇東坡や米芾（べいほう）などが集まったため、後世この名高い雅会を描いた絵が現われた。

注四十一 祭祀の法は、亦た儒者の口吻なり―本文の「俎豆を列ね精餞を設け、百拝稽首し、以て幸福を徼（もと）む」を指している。

平成十八年十月三十一日受理

うしお・ひろたか

Translation and Annotation of Shichifukujin

(七福神) (Vol. 6)

— Ishikawa Kōsai (石川鴻齋)'s Yasōkidan (夜窓鬼談) —

USHIO HIROTAKA

Abstract

We can read a printed version of this 2-volume book [Yasōkidan] in the National Diet Library. The book was written by a scholar of Chinese literature, Ishikawa Kōsai (1833~1918)

who lived from the end of the Edo period through the Meiji and he died in the Taisho period. The book is written in Chinese, however many stories had been brought into Japan apart from some exceptions. In this meaning, It can be a suitable work for a subject of a comparative study between Chinese and Japanese literature. Therefore I added the modern Japanese translation and notes for each of the sentences. Continued from the former part, I deal with [Shichifukujin] in the 6 th part of my paper. Referring to the Introduction of the original Chinese book and examples which is in the first part of my paper (bulletin Vol.19 No.2, July 1997) .

【Key words】 Demon, Fox, Raccoondog,
Mystery